



見沼たんぼくらのイベント

見沼ふれあい農園づくり 京芋・里芋・八つ頭・生姜栽培（その3）

収穫祭が11月16日（水）に晴天（気温16℃）のなか緑区見沼の畑で、見沼たんぼくらぶ会員27名及び福祉団体44名の総勢71名で盛大に行われました。今年はこの場所で2回目の耕作になるので秋の収穫が懸念されましたが、夏の暑い盛りの草取りなど地道な作業が功を奏して京芋、里芋、生姜はいずれも豊作となりました。しかし、八つ頭は連作の影響か出来栄はいまひとつでした。

当日は8時から会員全員で立派に育った京芋、里芋、八つ頭の芋ほりに取り組み、丁寧に収穫した後、10時頃には参加者が抱えきれないほどの芋を持ち帰り終了となりました。

また、福祉団体の（社福）久美愛園、（社福）ななくさ大谷作業所、（社福）さくら草、（NPO）ともに生きる会さんご、（社福）久喜けいわの5団体の皆さんも芋掘りに加わって、泥だらけになりながら京芋、里芋、八つ頭の土をへらなどで落として収穫を楽しんでいました。



なお、収穫祭に先立ち10月27日（木）にためし掘りを行い、この時に生姜はすべて収穫しました。参加者は「草取りは身体にこたえましたが、ためし掘りと収穫祭と2回もこんなに大量に収穫できるなんて驚いています。苦勞が報われた思いです。来年も期待しています。」などと話していました。（三上 雅央記）

第7回清掃ボランティア

今年で7回目を迎えた見沼たんぼ清掃ボランティア活動が11月3日の文化の日に、午前10時から行われました。場所は、東川口から東大宮まで広がる約1,260ヘクタールという広大な緑地空間の、ほぼ北端に位置する見沼グリーンセンター周辺。例年のおおりに、同センターの正門前から南へ向かい大和田公園通りまでのコースと北へ向かい神明橋通りから東武野田線までのコースの2手に分かれ、清掃活動に汗を流しました。



参加者は「会社で清掃ボランティアをしているので、子供たちにも体験をさせたかった」と家族4人で参加した岩槻区在住の方や「見沼たんぼの環境保全に興味があったので埼玉県ホームページの募集記事を見て参加した」と語る3人組の皆さんなど70人でした。当日は秋晴れ。気温がぐんぐん上がり、屋外活動をするのには打ってつけの1日になりました。収集されたごみは自転車2台や便器などの大物のほか、ペットボトルや空き瓶などが多数回収されました。

活動終了後に、参加賞の飲み物と恒例の見沼ファーム21が育てた新米「アサヒノユメ」約2合が手渡され、皆さんそれぞれ帰路に……。約2時間と短い時間でしたが、澄み切った青空の下で活動するのは、日ごろのストレスを解消するためにも良い機会となったのではないのでしょうか。来年も多くの皆さんのご参加をお待ちしています。（三上 雅央記）

見沼たんぼくらぶのイベント

第66回自然観察ハイキング

見沼代用水西縁から氷川女体神社、 見沼氷川公園へ

9月18日(日)、浦和駅東口に8時半集合。28名の方々が参加され、3班に分かれ市立病院、氷川女体神社、見沼ふれあい農園、見沼氷川公園のコースを散策しました。秋雨前線と台風16号などの影響もあり、途中、降雨にあったものの、見沼たんぼの西縁の流れに沿ってのハイキングは、秋の訪れを心行くまで楽しませてくれました。

この流れは江戸時代の享保13年(1723)に八代将軍・吉宗公の手によって造られ、約60km先の行田市下中条の利根川から取水したものです。桜並木が流れに沿って延々と続きますが、カナムグラ、クズ、ミズヒキ、スズメノカタビラ、サルスベリ・・・等々、それこそ数え切れないほどの草木の花々が歓迎してくれるのです。

自然観察指導員の方々が詳しい説明を、次々としてくださるのがさらに良い。草木の遊び方など



も飛び出し、エノコログサ(ネコジャラシ)の穂を逆さに握りしめ指を軽く動かすと、イモムシのように動いて動き出すのです。全く不思議な動きなので、一緒にきた小さな子供たちは飛び上がって喜びました。

武蔵国一宮の扁額の掲げられた氷川女体神社、見沼たんぼくらぶの管理している見沼ふれあい農園、と次々と回るので。最後は見沼氷川公園に立つ案山子の銅像の前に行き着きました。しめくりとばかりに、黄金の見沼たんぼに立つ案山子を歌った尋常小学校唱歌を「山田の中の1本足の案山子・・・」と、全員そろって大きな声で歌って解散しました。(召田 紀雄記)

県民参加秋野菜栽培

本年度の県民参加秋野菜栽培はさいたま市緑区大字見沼454に於いて9月3日(土)から種蒔・除草・間引き・短期成長野菜の収穫の4回の栽培作業を経て11月12日(土)には豊作(!)と評価できる収穫の日を迎えました。

本年度は県が公募した35家族113名と当会会員12家族29名の登録がされました。これに県担当・当会役員13名が加わっています。天候に恵まれ5回の作業日は雨天のため延期することなく順調に推移しました。作業参加延べ人員は379名で1回当たり76名です。子ども達の参加延べ人員は115名(1回当たり23名)でした。なお、農場の耕耘・施肥・畝作りなどすべての事前整備が8月末までに役員有志により実施され恙無く開催日を迎えられることになりました。

作付け野菜の品種は大根(青首・聖護院・紅芯・二十日)、蕪(本・紅・聖護院)、京菜・小松菜・春菊です。畝



数は全体で94畝にも達しました。

作業は5班に分けてベテランの役員による指導の下で行いましたが、初めての経験で種蒔はかなり不均衡なところもあり、間引きの際にはその対応となりました。除草は、栽培品種より雑草が元気良く成長も急激で除草してバケツに入れた雑草が直ぐ一杯になるなど非常に苦労しました。腰を曲げての作業もあることなどから農家の苦労を実感された方もおられたようです。それらの苦労は晴天の11月12日の収穫日に大きな喜びとして迎えられることができました。

収穫した主要野菜は家族単位に均等化して分配し、その他の収穫野菜は持てる範囲でお持ち帰りを願いました。残余の野菜については後日社会福祉団体に寄付することにしますが、11月20日以降に更に野菜があれば参加者に限り収穫して頂きたい、として無事終了しました。

(若野 忠男記)

見沼たんぼくらぶ及び会員関係イベント

第67回見沼の自然と史跡を訪ねて 氷川神社と紅葉の大宮公園 11月26日(土)

初雪の2日後だったが、9時には大宮駅東口には44名が参集。氷川参道まで誘導し、平成広場で初めの集いを開催し、5班に分かれて、自然観察指導員のガイドで観察と見学を開始。

基本コースは、氷川参道平成広場……二の鳥居……三の鳥居(境内入口)……神池周辺……本殿……大宮公園・一等水準点(海拔15.1m)……ボート池(水鳥)……博物館横(カキノキ)……小動物園(シラコバト)……日本庭園(マツグミ) * 粘着フィルムで押葉づくり



カキノキ[ウルシ科]: 標準和名はトネリバハゼノキ。学問の木とも。中国原産の落葉高木。昔、中国で修士に及第した者に授ける笏(コツ)と言う木札をつくる。

マツグミ[ヤドリギ科]: 図鑑によるとアカマツに寄生し、グミに似た赤い実がなるので、この名がついたとある。大宮公園にはアカマツが多いのに、なぜかモミだけに寄生する。

シラコバト[ハト科]: 江戸時代、鴉鳥として中国から渡来し、野生化。日本の天然記念物。埼玉県の鳥。ポポーと鳴き、鳩ポッポの歌のモデルとなった。

(小野 達二 記)

第238回見沼たんぼの自然観察会 12名で秋の野の花を楽しむ

10月1日(土)、大宮第二公園周辺で、NPO法人自然観察さいたまフレンド主催によるテーマ別のグループ観察会があった。

紙面の都合で、小生の担当だけ紹介する。公園を出ると、垣根沿いにヒガンバナが朱赤色の花を咲き誇っていた。例年より遅い満開だ。

見沼1丁目はまるごとみどり一色

大和田公園通りを渡ると、みどり一色の見沼一丁目だ。北側は東武鉄道、西側は見沼代用水西縁、東側は芝川だ。水田と畑と農道と草地で、建物が一つもない。

入口の垣根に五角形で朱赤色の花がいっぱい見えた。熱帯地方からきたマルバルコウだ。

近くの盛土には、乾性植物のチカラシバと新参者のアメリカタカサブロウが群がっていた。

畑まわりの花は在来種と帰化植物が競合

アキノエノコログサ・コツブキンエノコロ・イヌタデなどの在来種とキクイモ・コセンダングサなどの帰化植物が競うように生い茂っていた。

キクイモは、かつては根茎を豚の飼料とするために北アメリカから輸入し栽培された。今では野生化し、立派な帰化植物としてはびこっている。今では、糖尿病の方の健康食品として重宝しているようだ。

水田まわりの花は街にない湿性植物が弱酸性で湿り気のある土壌で、街では見られない実に美しい在来種の花盛りに、何度も歓声が上がった。

薄紫色のカントウヨメナ、ほんのり桜色のサクラタデ、気品のあるクリーム色のアキノゲシなどが人目を惹いた。

他には、ジュズダマやショウブもあった。

(小野 達二 記)

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

絵と解説 八木一郎

落葉かき (さいたま市見沼区 大和田1丁目)

さいたま市立大宮体育館南側の斜面林にある大和田緑地公園特別緑保全地区では、「自然観察さいたまフレンド(小野代表)」、「さいたま市みどり愛護会(小野会長)」が自然観察や植生・下草刈り・間伐などの保全作業を行っており、学校や市民団体などの雑木林体験の場ともなっている。かつては粗大ごみの捨て場などになっていたが、関係者の努力で市民の快適な憩いの場となった。その経過に対し、2015年彩の国埼玉県環境大賞[優秀賞]を受賞された。

例会当日(1月13日)は小雨まじりの日であったが、落葉かきに役員はじめボランティアの人々が落ち葉かきに熱心に取り組んでおられた。



メタセコイアの並木道路 (さいたま市緑区 南部領辻)

芝川に架かる見沼大橋から五斗蒔橋を経て日光御成街道に至る総持院沿いの道路には、メタセコイアの街路樹が整然として植栽されている。澄み切った青空に伸びる、葉を落とした姿は冬を耐え抜く強さを感じさせられる。



曹洞宗・光徳寺 (さいたま市見沼区 膝子 623)

光徳寺は江長山と号し片柳万年寺の末寺で、御成り街道に面し徳川将軍日光参拝時の休憩所として使用された由緒ある寺院。

1595年(文禄4年)開創といわれ、本尊の薬師如来を安置し、徳川3代家光将軍から13石の寺領を賜る朱印状が残されている。

本殿は1985年(昭和60年)再建されたもの。春お彼岸の頃のハクモクレンや下旬の桜の咲く季節は多くの人を訪れる。なお、新秩父札所の2番札所ともなっている。



見沼たんぼくらぶ会員作品展

「旧坂東家住宅 見沼クラシック館 管理棟」

作者 高橋悦子

旧坂東家を中心に伝統的な農家を再現する為、年中行事や様々な企画などを運営するための事務所となっています。

見沼スケッチ会も旧坂東家を中心としてスケッチ会を行っているため、大変お世話になっております。



見沼たんぼ探訪記

市民の森・グリーンセンターの秋

10月の初旬、北区見沼にある「市民の森・グリーンセンター」に行く。JR宇都宮線・土呂駅を降りて市民の森通りを歩くと、およそ10分足らずの所だ。見沼代用水西縁に架けられた「川島橋」を渡ると左手の森がそこである。

昭和54年10月に開園した公園であるが、昭和50年、大宮市市制35周年事業の一つとして建設着手されたという。正門を入れて真っ直ぐ進むと、樹木に囲まれた多目的広場に入るが、緑の芝生が秋の陽を受けてまぶしい。

手前の方で、子供たちを連れた若いお母さんが数人、ビニールシートを敷いて座り楽しそうに歓



談しており、子供たちはその周りでボールを蹴ってキャーキャー言い、大賑わいだ。同じような姿があちらでも、その向こうのあちらでも見られる。多目的広場の外周路では年配の方たちが、ウォーキングをして身体をほぐし楽しんでいる。お孫さんと一緒の方などは「おじいちゃん遅いヨー、早く、早く・・・」と励まされている。

多目的広場を含めたセンターの面積は1.4haと耳にしており、敷地の東西は芝川と見沼代用水西縁の流れに挟まれている。センター内には展示温室、リスの家、芝生広場・・・と色々な施設もある。

林間テラスを経て市民農園に回ると、広い農園は140区画にも分かれていて、思い思いの野菜を作っている。大根、小松菜、ニンジン・・・と数え切れない程の野菜を作っているのではないか。中でもサトイモを作っている人が多いのには驚いた。「煮転がし」にして食すと実にうまいので、作っている皆さんの大好物なのであろう。

(召田 紀雄記)

第13回さいたま市みどりの祭典

第13回さいたま市みどりの祭典は10月第3土・日曜日の15日～16日に見沼たんぼ北西部に位置するさいたま市北区の市民の森・見沼グリーンセンターに於いて、同実行委員会・さいたま市主催により開催されました。両日とも好天に恵まれて入場者は9,700人でした。この祭典は「みどりに親しみ、みどりから学び、みどりを守り育てましょう！」をテーマとしています。会場には常緑広葉樹のタブノキ・シラカシや落葉針葉樹のメタセコイアなどが陽に映えて緑葉を鮮やかに輝かせています。

この祭典の参加は18の自然保護団体・農業関係・大学・小中学校など、更には軽食販売の福祉施設が加わり36張りのテントが中央会場を囲む楕円形に設置されました。各参加のブースでは開催趣旨に合致した日ごろの活動を基に夫々工夫を凝らした催しを展開しました。事例を挙げると、活動を開示するパネルや標本の展示、木の実・木の葉など自然の素材を基に玩具・創作作品作りなどの来場者参加型の催しをはじめ、ドングリの里親、稲の処理体験、グリーンアドベンチャー、高所作業体験などが行われ、入場者が自然に対する新しい知識や楽しかった思い出を呼び戻す機会を提供できたものと思われ



ます。また、歌と二胡演奏、大宮アルディージャのキックターゲットなどの催しなどがありました。会期中の入場者へのアンケートでは3～5人の家族連れが多く、催しでは、例えば草木を素材とした玩具作りなどの来場者参加型が好評だったようです。

筆者の所属する団体は5張りのテントを活用して、会の諸活動を記録したパネルの展示、らっきょうコーナー(写真参照・小学低学年を対象)、フィルム促成押し葉・木の葉スタンプ作り、水辺の生き物展示・解説、芝川のパックテストによる水質測定、セミの抜け殻の拡大鏡による種の判定・解説などを行いました。(若野 忠男記)

見沼たんぼの仲間たちNo.40

ジャコウアゲハの保護活動

堀江 誠之

見沼たんぼでジャコウアゲハの生育のお手伝いをしています。みたがいという老人ホームに住んでいる堀江誠之と申します。

五年くらい前に岡山の友人から、「埼玉にもこういう蝶がいるかい」とたずねられ、見せられたのがジャコウアゲハでした。翅を広げると12センチくらいもある大型です。オスは翅全体が黒く、メスは灰白色で燕尾の部分にオレンジ色にある斑点が特色でした。

翅を忙しくバタバタするのではなくゆったりとグライダーのようなとびかたをします。大型なの



にフェンスの間をすりすりすり抜けたり風を利用した優美な飛び方をします。

五年前のその時から、ひとりで主に自分の住んでいる見沼たんぼの見沼代用水東縁の周辺を探しましたが見つかりませんでした。緑区の見沼代用水西縁をも手を広げて探訪しましたが、その時はみつけることができませんでした。

埼玉にもジャコウアゲハのいることや比較的身近なところにいることが分かったのはつい最近です。なぜみつけることができなかったのか原因はすぐわかりました。食草であるウマノスズクサがすくなくてジャコウアゲハがたくさん育つ環境が無かったことです。

どこにでもある雑草のようなものですが、雑草と同じように除草剤を散布されたり、刈られてしまうことで、ウマノスズクサが育たなくなりそれがないと繁殖できなくなっていました。

ジャコウアゲハが埼玉でも準絶滅危惧種に指定されていることを^{そくぶん}仄聞し、なんとか普通に育つ環境を整備できないかと期待したのが私とジャコウアゲハとの関わりです。

農薬散布は少なくなりました。人間が安心して



暮らせる自然環境を測るバロメーターとしてもジャコウアゲハの生育環境のあることが自然界のひとつの形として大切ではないかと思えます。

最近では、ジャコウアゲハの生態もある程度わかるようになりました。なぜ、漢方薬にも使われているアリストロキア酸という毒の要素も持った「ウマノスズクサ」しか、食草としないのか疑問ですが、分らないことの多い自然界の仕組みに関わることも楽しいです。他にはホソオチョウという帰化蝶が唯一ウマノスズクサを食草とするようです。



みなさん、ジャコウアゲハの翔ぶ四月から十月、ウマノスズクサを見つけて産卵、幼虫（一齢～五齢）、蛹、羽化の過程を見つけて楽しんでください。自然界からの贈り物です。羽化の状態が観れるとラッキーですよ。

見沼たんぼを支える農家さん

「見沼の卵」 浅子幹夫さん

埼玉スタジアムへ向かう新見沼大橋の脇、芝川と代用水東縁の間に、産みたて卵と季節の野菜や米を扱っている浅子幹夫さんの直売所があります。直売ハウスのすぐ裏の2棟の鶏舎の中では白、黒、茶色のニワトリがのびのびと歩き回ったり、餌をついばんだりしています。正に「産みたて」です。

浅子さんのお宅は元々農家でしたが、ずっと建築関係の会社に勤めていた幹夫さん。12~3年前に農業專業になって、それまで主に栽培していた鉢物や苗木などの植木から、養鶏と野菜や米の栽培に切り替えました。

約200羽のニワトリはすべて平飼い。ゆったりとした鶏舎の中で、自家製の飼料米や野菜などを加えた餌で育てています。野菜は季節ごとの旬のものを種類豊富に栽培。販売は直売を主に、スーパーなどにも卸しています。



(平飼いのニワトリ小屋)

耕作放棄地の解消はライフワーク、と語る浅子さん。放棄された水田の復活にも積極的に取り組んでいます。用排水路の整備の遅れなどで

条件が悪い所も多く、そのうえに米の価格の低迷でたんぼをやる人は減り続けているため、年々、放棄される水田は増える一方だそうです。

悩みは、小さなたんぼがあちこちに点在してしまうこと。作業の効率が悪く、面積を増やすこと

が難しくなります。やめていく人も多い中、農業に積極的に取り組もうとしている人たちがいることも確かです。農地の集約化をすすめて利用しやすくし、そうしたこれからの担い手となる人たちが活用しやすい体制を整えることが必要だといえます。

冠水被害が多い見沼は、農地としての条件は良くないけれど、代々、ここで農業を続けてきた。このあたりは江戸初期頃から住んでいる人も多い。ここを離れるわけにはいかない。何とかしてここで農業を続けていかなくてはならない、と語る浅子さん。新しい取り組みを始めようとしている



(ヤギと一緒に浅子幹夫さん)

かしこで日向ぼっこをしていました。耕作放棄地の除草役ですが、保育園などからの貸し出し依頼も多く、子供たちの人気者だそうです。

広々と広がる畑や草地。ヤギがのんびりと草を食む隣には、浅子さんが「見沼の現状」として指し示す、放置状態の産廃物置き場。早くも弱まってきた晩秋の午後の陽射しの中で、見沼の「今」を考えさせられました。

取材：島田 由美子・高橋 いずみ

文責：高橋 いずみ

・直売所：Tel：080-6789-2370

見沼たんぼくらのイベント案内

第109回見沼塾『見沼たんぼの野鳥観察』

日時：2月19日（日）9時30分～12時
集合地：見沼自然公園管理棟向い側

- 見沼自然公園修景池その他で、小峯 昇はじめ自然観察指導員が解説します。

申込み：当日、集合地で9時から受付
参加費：¥500（ただし、会員は無料）
交通：大宮駅東口からバス⑦浦和学院高校・浦和美園駅西口・さいたま東営業所・大宮東高校各行き「締切橋」下車、南側（乗車時間は約30分）

第68回見沼の自然と史跡を訪ねて『圓蔵院のシダレザクラと中山神社へ』

日時：3月25日（土）9時～12時
集合地：JRさいたま新都心駅改札口向側
協力：NPO法人自然観察さいたまフレンド

- コース＜駅で受付、新都心東広場へ誘導＞
さいたま新都心駅 ⇒ 新都心東広場……見沼代用水西縁……大宮南部浄化センター（自然庭園）……上山口新田（田圃）……圓蔵院……中山神社 *大宮駅行きバス停
申込み：当日、集合地で8時30分から受付
参加費：¥500（ただし、会員は無料）

会員の主宰するイベント情報

第240回見沼たんぼの自然観察会

日時：1月29日（日）9時30分～12時30分
集合・解散地：大宮第二公園南管理棟
主催：NPO法人自然観察さいたまフレンド

- 自然観察指導員のガイドで、テーマ別のグループに分かれて行動
- ① 野鳥入門 佐々木明男
- ② 冬芽を観察しよう 小原 邦彦
- ③ 水の生き物観察と水質調査 小野 達二

申込み：当日、集合地で9時から受付
参加費：¥500（ただし、中学生以下無料）
交通：大宮駅東口からバス⑧「芝川」下車北側
大宮発 8:35 or 8:55（乗車時間約10分）

見沼たんぼくらの会員募集中！

見沼たんぼをもっと知りたい
見沼たんぼの自然にふれてみたい
見沼たんぼで何かしたい
見沼たんぼの保全に協力したい
そんな皆さまをお待ちしています！

- 季刊『みぬま通信』を郵送します。
4月・7月・10月・1月発行
- 埼玉県土地水政策課の支援のもとに、見沼たんぼ地域の里やまで、様々の体験事業を展開しています。子どもから年寄まで気軽に楽しめるイベントです。
 - …見沼ふれあい農園づくり
農地はスタッフが耕運し、畝づくりを済ませ、種蒔き・植付から除草、収穫までの作業です。「京芋・里芋・八つ頭栽培」や「秋野菜栽培」などを楽しみ、福祉施設にも寄贈しています。
 - …自然観察ハイキング
自然観察指導員のガイドで、年4回、史跡を巡りながら花や鳥など見て回ります。
 - …見沼たんぼ清掃ボランティア
 - …斜面林の体験学習
 - …見沼塾—見沼の自然や文化を学ぶ講座
- 年会費 個人（同居の家族単位）・団体・企業とも1口¥1,000（団体・企業は3口以上）

みぬま通信第69号

発行日 平成29年月1月1日
発行所 見沼たんぼくらぶ
〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町
1-2124-3 小野方
TEL・FAX (048) 683-1764
E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp
URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2017 Minuma Tuusin